

## 「縄文のカメ棺特集」後記

## 西日本のカメ棺一覽

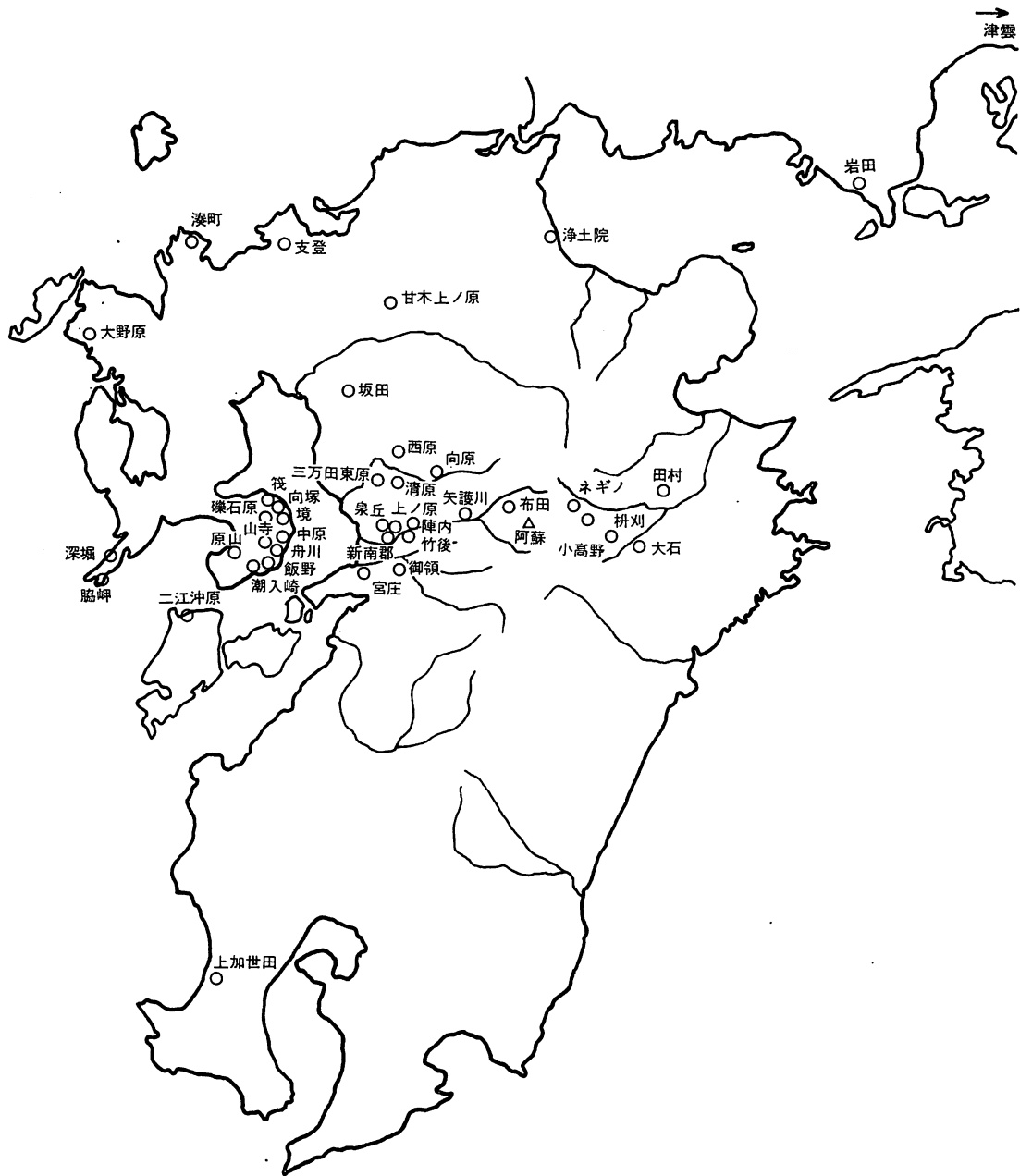
考古学論叢2号は、「縄文時代のカメ棺」という課題での論集となった。勿論カメを棺として使用する風習は、早、前期からすでにあったように思う。だが、それは縄文時代の埋葬例の一つの方法としてであったに過ぎぬ。カメを棺とする呪術的埋葬例は、縄文時代の一つの宗教的問題であって数多くの葬法の中で、カメを棺とすることの理由はいまだにはっきりとはわからない。

西南日本特に九州において、カメ棺が登場し、それが葬制として固着するに至ったのは、私のいう「縄文ころがす技法」による土器製作の終熄と、新しく登場する「黒色磨研土器」の出現の時期を境としてからであるようだ。縄文晩期という土器製産の画一的工法の問題（工房の発見はまだできていない）によって、当時の専門化と生産の発達はやや容易に相定される。そうした縄文晩期にカメ棺は北部九州に広く分布をみるようになった。

遺跡	出土地	個数	特徴	時期	報告者
1 筏	長崎、北高来、国見町	35	合口大形9小形8	後期磨消縄文Ⅲ式	(古田 正隆 上田 俊之 賀川 光夫)
2 脇崎	〃 西彼杵、野分町	1	被カメ葬	同	(内藤 芳篤 坂田 邦洋 賀川 光夫)
3 深堀	〃 長崎市 深堀	2		晩期Ⅰ式	(内藤 芳篤 坂田 邦洋 賀川 光夫)
4 ニツ石	〃 北高来郡有明村	1		晩期	古田 正隆
5 境	〃 〃	1		晩期Ⅱ式	古田 正隆
6 礫石原	〃 島原市、三会	5		晩期	(古田 正隆 日本考古学 協会)
7 山寺	〃 北高来、深江町	1	合口	晩期Ⅱ式	古田 正隆
8 中原	〃	1		晩期Ⅱ式	古田 正隆
9 舟川	〃	1		晩期Ⅱ式	古田 正隆
10 飯野	〃 南高来、布津町	1	合口	晩期Ⅱ式	上野 辰男
11 潮入崎	〃 同 同	1		後期黒色磨研Ⅱ式	伊達 亮秀
12 向原	〃 同 有明町	1		晩期Ⅲ式	森 貞次郎
13 原山	〃 同 北有馬町	2	合口	晩期Ⅲ式	岡崎 敬
14 大野原	北松浦、鹿町町	1	合口	晩期Ⅲ式	(内藤 芳篤 小田 富士雄)

15	ネギノ	大分、竹田市、菅生	1	合口	晩期Ⅱ式	(大塚 力 佐藤 堯 賀川 光夫)
16	枳 刈	〃	1		晩期Ⅲ式	(大塚 力 賀川 光夫 牧尾 義則)
17	田 村	〃 大野、朝地	7	合口 4	晩期Ⅱ式	(羽田野一郎 賀川 光夫)
18	小高野	〃 竹田、小高野	5	合口 1	晩期Ⅱ式	(鳥養 孝好 坂田 邦洋 賀川 光夫)
19	大 石	〃 大野、緒方	2		晩期Ⅰ式	(芹沢 長介 賀川 光夫)
20	三万田	熊本、菊地郡泗水町			後期黒色磨研Ⅰ式 (三万田式)	緒方 勉
21	向 原	〃 鹿本郡鹿央町			後期黒色磨研Ⅱ式 (御領)	隈 昭志
22	清 原	〃 玉名郡菊水町			同	高木 正文
23	轟	〃 宇戸市宮左		人骨	同 (人骨)	松本 雅明
24	御 領	〃 下益城、城南町		人骨	同 (人骨)	小林 久雄
25	布 田	〃 阿蘇郡、西原村	2	合口 1	同	乙益 重隆
26	上ノ原	〃 熊本市健軍			同	富田 紘一
27	竹 後	〃 同 竜田町			同	松本雅明他
28	陣 内	〃 同 竜田町			同	上野 辰男
29	沖ノ原	〃 天草郡、二江			同	(内藤 芳篤 坂田 邦洋)
30	南 部	〃 熊本市新南郡			晩期Ⅰ式B	上野 辰男
31	西 原	〃 山鹿市鍋田	3		晩期Ⅱ式	(隈 昭志 杉村 彰一)
32	泉ヶ丘	〃 熊本市健軍			晩期Ⅲ式	平岡 勝昭
33	水の山	〃 菊地郡大津町	2	合口 1	晩期Ⅲ	隈 昭志
34	坂 田	福岡県山門郡瀬高	2		晩期Ⅰ	鏡山 猛
35	浄土院	〃 京都郡苅田町	2		後期磨消縄文Ⅲ	(小田富士雄 他)
36	上 原	〃 甘木市馬田	1	合口 (上ガメに靱痕)	晩期Ⅲ	朝倉 高校
37	支 発	〃 糸島郡前原町	1	合口	晩期Ⅲ	文 化 庁
38	石ヶ崎	〃 同 前原町曾根	1	合口	晩期Ⅲ	原田 大六
39	湊 町	佐賀県唐津市湊町	1	合口	晩期Ⅲ	松岡 史
40	五 久	〃 同二丈町五久	1	合口	晩期Ⅲ	松尾 禎作
41	上加世田	鹿児島県加世田市	?		晩期Ⅰ	河口 貞徳
42	津 雲	岡山、笠岡市、津雲	3	内人骨 2	晩期初	(清野 謙治 大串菊太郎)
43	岩 田	山口、熊毛郡平生	5		晩期初	潮見 浩
44	神 田	山口、下関市神田	1	被カメ	後期	山 口 県

以上のカメ棺出土地は、本稿執筆者により報告された分を集録したものであるが、これには西北九州における宮崎県が空白で、鹿児島県の場合も河口貞徳氏の鹿児島県考古学第7号の加世田市、上加世田遺跡のカメ形土器の出土については棺と断定していないので、正確をきすわけにはいかなかった。しかし、他の例から考えてカメ棺とみられるかも知れず、ここに一覧に加えおくことにした。



西日本における縄文のカメ棺出土地

九州各地で、このカメ棺による葬例が更に調査されれば、弥生前期埋葬の問題提起となることとおもわれる。この問題を今後更に追求して行かねばならぬ。なお熊本県の場合は出土数が明らかでないものがあって全体の計数を確実にあげ得ないが、個体数で100例を越すことは確実である。今後、縄文の埋葬について大いに関心をしめさなければならぬ。西北九州を中心とした北部九州において、この縄文後晩期カメ棺の出現と、問題を提起した論文や、報告が今後次第に多くなることを期待して止まない。

縄文後、晩期に農耕開始の時期を求める研究の中で、埋葬にカメ棺をあて、こゝから弥生式前段の文化諸相を考えるとという問題を提起した。埋葬の特徴をもって、縄文後、晩期の状況を判断することは、ある意味では問題が多い。特にカメ棺を弥生式文化につなぐことについては、注意しなければならぬ。土壌や、石棺など、墓地の検討や、集落と墓域の問題研究など多くの研究が今後に残されている。こうした中で、あえてカメ棺の発達に注目したのは、弥生式文化の中で、その墓制に占める位置が大きく、それをもって、弥生文化の社会的研究の中核の問題と考えるからである。墓制ということを経験的に考えるとすれば、土壌の占める位置が圧倒的に多く、そのことは弥生文化自体でも同じであるとみられる。更に、カメ棺自体の問題としても、大多数が幼児等の埋葬も事実であるが、容器内埋葬の広範囲の用途においてもなお弥生文化が、墓制においてそれを特徴としたことは間違いでなく、その源流は追求されるべきであると考えた。

縄文時代の可成り古い時期において容器埋葬が存在していることも周知の如くであるが、弥生文化のカメ棺の特異な発達について、それ自身の前期文化における葬制とともに、前段の縄文後、晩期のそれは、大いに注目されねばならぬというべきであろう。このような意味から、本論叢2号を縄文時代のカメ棺の特集として出版し、多くの研究者の批判を賜りたいと考えた次第である。

(賀川)